

# ちよつとちがうぜ 中国で農業

土下信人 (つちした・のぶひと)

1949年愛知県生まれ。95年、沖縄で(有)土下を設立。組織培養技術を活用した苗生産・販売を中心とした農業のコンサルタント業務を開始。上海で組織培養施設への指導を行ない、2003年同地で組織培養会社、上海百奥微繁植物有限公司を設立。HP「大きな国で」を開設。  
<http://blog.livedoor.jp/touxia/>

## 第57回 大地に彫る彫刻

### 1万haの棚田

本誌の最初のページに掲載されている「農業は大地に鋤で彫る版画なり」という言葉を思い出しながら雲南省の元陽の街に出かけた。元陽を中心にして約1万haもの規模があるという、雲南でも有名な棚田を目指していたからだ。そこは中国映画『ルオマの初恋』の舞台でもある。

棚田がある老虎嘴<sup>ラオフズイ</sup>エリアを一望できる観光スポットを目指して、標高1600mほどのところにある元陽の新街からバスに乗り込んだ。目的地付近からは地元のガイドを先頭にして林の中を徒歩で下る。そうして林を抜けた先には、息を呑む景観が広がっていた。老虎嘴の山の斜面には彫刻刀で彫りこんだかのような無数の棚田があり、ニンゲンの生きようとする凄まじいばかりの執念を見らるようだ。俳人・村上鬼城が「生きかほり死にかほりして打つ田かな」と詠んだ気持ちもよく分かる気がした。

### 棚田を作り上げたハニ族

起伏に富む雲南では、多様な民族が標高によって住み分けている。海拔144〜600mにタイ族、60〜1000mに壮族、1000〜1400mにイ族、1400〜2000mにハニ族、2000m以上に

苗族と譚族といった具合だ。老虎嘴で稲作、つまり棚田を作り始めたのは、1200年前、唐の初めに元陽に住み着いたハニ族だ。

現在132万人いるというハニ族は「大自然の子」ともいわれており、稲魂信仰なども現在まで継承されている。元陽に来た当初は「和夷」と呼ばれたこともあったそうだ。私はいまだに照葉樹林文化信奉者で雲南に日本のルーツがあると信じている。彼らには日本のルーツを感じる。ハニ族が作った棚田やその周囲を見て不思議に感じたのは、街が山の尾根近くにあることだ。棚田は街の下に続くように作られている。ハニ族は天空の街に住んでいるかのようだ。

### 棚田は美しい？

元陽では、2012年に棚田を世界遺産に登録できるよう観光地化をどんどん進めている。私が訪れた際も新しいホテルが建設されおり、米国人らしき旅行者が観光バス2台で棚田の見学に来ていた。観光客相手のガイドも増えている。

しかし、棚田がコメを作るところではなく観光のための場所になりつつあることに疑問を覚えた。観光地化することは外側から農業を壊して

いくことにならないのだろうか？そもそも棚田は本当に美しいものなのだろうか？人の手が入らず自然のままであった大地を切り刻み、ニンゲンが生きていくための糧を無理やり作り、山という自然を破壊している。天空の街を作り、見渡す限りの山を棚田にしてしまう。イネは次につながる生命をニンゲンに食べられてしまう。ニンゲンは自然を征服した気になったのだろうか。

農業の持つ根源的な醜さに思いを巡らして気が付いた。農業という営みは自然を破壊しながら成り立つ。それを自覚することで、大地の恵みに感謝するという意味でより本質的な農業の仕方を組み立てていくことができる。



老虎嘴一帯に広がる棚田。